

日刊サイゾー

- 芸能
- 社会
- ビジネス
- カルチャー
- 海外
- 連載・コラム
- インタビュー

イチオシ企画

【PR】DYM・水谷佑毅社長の野望とは？



医師免許を持つ、ベンチャー経営者の異色の半生！

特集

話題作少なめ!?今クールドラマ、何を見るべき？



1月クールのドラマが続々スタート！…するもなかなか話題作に乏しい様子。意外な良作があるかも？

人気連載

あやややモー娘。が誰かの人生を救った『あの頃。』



オタクにすらなれない人間は、動物化するのか…

インタビュー

井筒和幸×松本利夫（EXILE）『無頼』対談



閉塞的な社会にパッチギ（頭突き）をかまそうとする若者たちを主人公にした『パッチギ！』…

日刊サイゾー トップ > 社会 > 日米社会を蝕む処方薬の闇

弱者を依存症と死に追いやり日米社会を蝕む処方薬の闇！ 米国ではオピオイド、日本ではベンゾの被害が蔓延

いいね！ 0 ツイート 9 0

2021/02/12 11:00
文＝古澤誠一郎

- 雑誌
- ドラッグ
- 薬
- 処方薬
- オピオイド
- アヘン
- 依存症

——米国ではミュージシャンのプリンスや俳優のフィリップ・シーモア・ホフマンが過剰摂取し、その死亡の原因となったオピオイド。2017年にはトランプ大統領が非常事態を宣言するなど、近年は“オピオイド危機”と呼ばれる社会問題になっている。そうした状況は対岸の火事にも思えるが……。 ([「月刊サイゾー」12月号](#)より一部転載)



(写真／Kevin Winter／Getty Images)

2019年の米国で、薬物の過剰摂取で亡くなった人は約7万2000人。そこで乱用された薬物の多くはオピオイドとされている。

オピオイドとは、ケシの実（アヘン）から生成される麻薬性鎮痛薬やその関連の合成鎮痛薬の総称。日本ではモルヒネがよく知られているが、米国ではパーデュ・ファーマ社の鎮痛薬・オキシコンチンを入口に、依存症者が急増した。その状況は「オピオイド危機」と呼ばれ、00年代に入った頃から徐々に社会問題化。17年にはトランプ大統領も公衆衛生上の法に基づく国家非常事態宣言を行った。

一方の日本では、オピオイドの乱用や依存症の問題はほとんど出ていないが、ベンゾジアゼピン系の睡眠薬・抗不安薬において、依存症の被害が深刻化している。

記事を検索

🔍

▶ ×

	112,279円		
102,528円	70,694円	207,020円	
109,476円	164,833円	76,508円	
111,689円	279,503円	333,586円	

- 👑 人気記事ランキング すべて見る >>
- 社会 総合
- 1

日米社会を蝕む処方薬の闇
- 2

日本の犯罪が“巣ごもり”傾向…児童虐待DV増加
- 3

原田泳幸容疑者 ハロプロで謎ステージの過去
- 4

SIMロック禁止で起こり得る問題点とは
- 5

Netflix、値上げでも問題はないその理由

[トップページへ](#)**注目記事** 『ホンマでっか!?TV』元モー娘。藤本美貴の自分勝手すぎる発言に視聴者がドン引き

の現状を、有識者の声をもとに紐解いていく。

まずは米国のオピオイド危機について。米国は各州での合法化を巡り議論が続く**大麻**（マリファナ）をはじめ、**ドラッグ**と日常との距離が日本以上に近い国だが、近年のオピオイド危機ではなぜ問題が大きくなったのか。

今年に日本で発売された書籍『DOPESICK〜アメリカを蝕むオピオイド危機〜』（ベス・メイシー著／**光文社**）の訳者で、自身もジャーナリストとしてオピオイド問題を追いかけてきた本誌連載陣のひとり、**神保哲生氏**に話を聞いた。

「米国に依存性のある薬物が蔓延し、依存症者が大量に出た時期は過去にもありました。南北戦争時に流行したのも、オピオイドの一種であるモルヒネです。そして近年のオピオイド危機については、鎮痛薬として処方されたオキシコンチンが入口となり、より濃度が高く、依存性の高いオピオイドが流行したため、被害が甚大になった点が特徴といえます」（神保氏）

たとえば16年に亡くなったプリンスが過剰摂取していたフェンタニルは、強力なオピオイドの代表例。その強さはモルヒネの50～100倍とされている。そして近年は、フェンタニルのさらに100倍の効力を持つカルフェンタニルも中国などから米国へ流入。オンラインで容易かつ安価での輸入が可能な状況が続き、医師の処方を経ずに闇市場でも出回るようになった。

「そうしたオピオイドは依存性も非常に高いため、オーバードーズによる死者も多く発生。心身の離脱症状も激しいので、入手の手段を選ばずに**犯罪**に手を染める人も増えていきました」（神保氏）

また依存症者の多くが白人だったことと、**経済的**に苦しい内陸部から被害が拡大したことも近年のオピオイド危機の特徴だった。その背景には、米国の医療保険制度の問題があるという。

「オキシコンチンは処方薬のため、日常的に医者にかかっている人でないと処方がされません。4000万人以上の無保険者がいた米国では、無保険で所得の低い人たちは、そもそもオキシコンチンの処方と縁がなかったわけです。そしてオキシコンチンを販売するパーデュ・ファーマは、65歳以上の人が対象の『メディケア』、低所得者向けの『メディケイド』といった公的保険の対象者が多く住むエリアを狙い、営業戦略を打ち立てました」（神保氏）

そこが白人が多く住むエリアだったわけだ。

「いわゆるラスト・ベルト（さびついた工業地帯）やバイブル・ベルトと呼ばれるエリアで、かつては鉄鋼や**自動車**、炭鉱などの産業で栄えた**地域**です。そうした地域では**労働組合**もしっかりしているため、公的保険の加入者が多く、肉体労働で膝や腰を痛めた人も多い。**パーデュ・ファーマ**は、そうしたエリアの医師に接待等を行い、オキシコンチンを積極処方させ、患者を依存症にして利益を伸ばしていきました」（神保氏）

そしてオピオイドの依存は、比較的裕福な白人にも拡大。若年層での被害も深刻だった。

「米国では**学校**で行われるスポーツも保険対象となるため、スポーツで怪我をした学生にもオピオイドが処方されてきました。そして大勢の生徒が訪れる学校の指定医などが、製薬会社に取り込まれてオピオイドを大量処方すると、多くの余剰オピオイドが発生する。それを学生たちがパーティで回し飲みして、さらに被害が拡大した。これが裕福な郊外エリアでのオピオイド依存拡大のひとつのパターンで、やはり被害者は白人が中心でした」（神保氏）

- 8 **ドコモ「ahamo」はおトクの限界値？**
- 9 **楽天銀、1,000万口座突破で経済圏に敵なし**
- 10 **OO Payキャンペーンまとめ2月12日版**
- PR 下剤などを使わず、体の自然な働きによって便秘を解消/便秘薬に変わる驚
- PR 下剤などを使わず、体の自然な働きによって便秘を解消/便秘薬に変わる驚

プレシ...	▶ ×
102,528...	
シンプ...	
70,694...	
ネスカRミニ (ラウンドスタイル)	
109,476円	



人気連載 すべて見る >>

元木昌彦の『週刊誌スクープ大賞』
「週刊現代」「FRIDAY」の編集長を歴任した"伝説の編集者"元木昌彦による週刊誌レビュー
[▶ 一覧へ](#)

"キング・オブ・アウトロー" 瓜田純士、かく語りき
"キング・オブ・アウトロー" 瓜田純士の最新情報をお届け！ 嫁・麗子も時々登場。

[トップページへ](#)[注目記事](#) 『ホンマでっか!?TV』元モー娘。藤本美貴の自分勝手すぎる発言に視聴者がドン引き

「米国の医師たちは、オキシコンチンに代表されるオピオイドを、黒人に対してはあまり処方しない傾向がありました。この行動は『黒人に薬を与えると乱用もするし依存症にもなるはずだ』という、明らかな偏見にもとづいたものだったことが医師らに対するアンケートで明らかになっています」（神保氏）

そして米国に根強く残るドラッグカルチャーも、依存症の拡大を後押しした。

「オキシコンチンは薬の成分が少しずつ・長時間放出され続ける徐法性製剤。特殊なコーティングにより、服用後は12時間ほど鎮痛効果が持続する点が最大のセールスポイントでした。ただ、内部の成分に強い依存性がある点は変わらず、成分の濃度は従来の鎮痛剤より遥かに高いものでした。そこで米国では、その錠剤を砕いて鼻から吸ったり、蒸留水で溶かして自分で血管に注射したりする人が出てきたわけです。ドラッグに関してそのようなノウハウが存在し、実際に器具も出回っていた点は、日本にはない特徴でしょう」（神保氏）

こうした乱用の問題もあり、製造元のパーデュ・ファーマは10年になってオキシコンチンの製剤方法を変更する。その後のオキシコンチンは、粉碎するとゲル状になるため、粉末として使用ができなくなった。

「しかし、その変更がなされるまでには10年以上の月日がかかってしまった。その時点で依存症者はすでに全米に広まっていた。処方薬のオキシコンチンが根を広げ、そこからより依存性の強いオピオイドの乱用者が増えていったのが、今のオピオイド危機の実態というわけです」（神保氏）

そして経済的に苦しむ内陸部から、より豊かな郊外へと拡散していったオピオイドの依存症に対しては、[メディア](#)の報道や対応も遅れを取った。

「『DOPE SICK』の著者のベス・メイシーはバージニア州西部の地方新聞『ロアノーク・タイムズ』の記者でしたが、こうした地方紙の記者もオピオイドの問題には長く気づけませんでした。というのも、オピオイドが拡大していったのは、インターネットの隆盛などによって、地方紙が衰退の一途をたどっていた時期でと重なっていたからです。こうやってオピオイド危機の背景を見ていくと、現在の米国のさまざまな分野の社会問題がオールスターのような形で揃っています」（神保氏）

[次のページ](#) **政府のキャンペーンで誤った安全神話が拡大**

1

2

れびの『テレビ日記』

テレビの気になる発言から、世相を斬る！

[▶一覧へ](#)

じゃまおくんのWEB漫クエスト

マンガレビューブログ管理人じゃまおくんが、インターネットに埋もれる一押しマンガを発掘！

[▶一覧へ](#)

腹筋王子カツオ『サイゾー筋トレ部』

“腹筋インストラクター”腹筋王子カツオさんが、自宅でも簡単にできるエクササイズを紹介！

[▶一覧へ](#)

クレジットカードのお役立ち情報サイト
Creditcard Journal

イチオシ企画

【PR】DYM・水谷佑毅社長の野望とは？



医師免許を持つ、ベンチャー経営者の異色の半生！

特集

話題作少なめ!?今クールドラマ、何を見るべき？



1月クールのドラマが続々スタート！…するもなかなか話題作に乏しい様子。意外な良作があるかも？

人気連載

あやややモー娘。が誰かの人生を救った『あの頃。』



オタクにすらなれない人間は、動物化するしか…

インタビュー

五輪延期でボランティア問題再燃？



新型コロナウイルスの感染拡大が深刻化するなか、国際オリンピック委員会（IOC）は東...

日刊サイゾー トップ > 社会 > 日米社会を蝕む処方薬の闇

弱者を依存症と死に追いやり日米社会を蝕む処方薬の闇！ 米国ではオピオイド、日本ではベンゾの被害が蔓延

いいね！ 0 ツイート 9 0

2021/02/12 11:00
文＝古澤誠一郎

雑誌

ドラッグ

薬

処方薬

オピオイド

アヘン

依存症

政府のキャンペーンで誤った安全神話が拡大

ここまでの神保氏の話からも、米国のオピオイド危機が同国の人種問題、[貧困](#)や格差の問題、[メディア](#)の問題など、さまざまな社会問題と深く関わっていることがわかっただろう。

一方の日本では、オピオイドは医療用麻薬の扱いとなるため、その使用や管理は法令により厳格に規定されている。そのため依存症などの問題はほとんど起こっていないが、精神科などで処方されるベンゾジアゼピン系の睡眠薬・抗不安薬（以下、ベンゾ系薬剤）は、その依存症に苦しむ人が多く、問題は深刻だ。

ベンゾ系薬剤は「切れ味のよさ（即効性）」が特徴といわれ、不安・緊張の緩和、睡眠導入効果の高さから、精神科を中心に一般科でも数多く処方されてきた。日本での代表的な薬はデパスやハルシオンなどだ。このベンゾ系薬剤には、ふらつき、転倒、記憶障害、せん妄などの副作用があり、保険適応の処方量・用法でも依存症になる「常用量依存」のリスクも指摘されている。常用者が急に服用を止めると、不眠、動悸、不安感などの強い離脱症状も出ることがあるため、減薬も難しい。大手メディアでの報道はまだ少ないものの、国家賠償請求の集団訴訟を目指す団体も近年は立ち上がっている。

なぜ日本では、そのベンゾ系薬剤の被害が深刻化してしまったのか。読売新聞医療部に在籍中の10年以上前から精神医療の問題を追いつけ、『なぜ、日本の精神医療は暴走するのか』（講談社）などの著書も発表してきた医療ジャーナリストの佐藤光展氏は次のように語る。

「ベンゾ系薬剤の常用量依存については、すでに1980年代の欧米で指摘がされていましたが、日本では致死性の低さを理由に、『多くの量を服用しても死の危険性が低い＝安全な薬』というおかしな神話が生まれていました。そして内閣府が10年から自殺対策の一環として展開した『睡眠キャンペーン』も、その誤解を後押ししています。その公式サイト上では、ベンゾ

記事を検索

🔍

▶ ×

109,476円		
70,694円	102,528円	112,279円
11,810円	111,689円	279,503円
76,508円	96,607円	164,833円

👑 人気記事ランキング すべて見る >

社会

総合

1

日米社会を蝕む処方薬の闇

2

日本の犯罪が“巣ごもり”傾向…児童虐待DV増加

3

原田泳幸容疑者 ハロプロで謎ステージの過去

4

SIMロック禁止で起こり得る問題点とは

5

Netflix、値上げでも問題はないその理由

[トップページへ](#)

注目記事

『俺の家の話』クドカンが描く“育ちの差”…幼少期に形成された金銭感覚は大人になっても変わらない



ました」（佐藤氏）

また患者の診察を行い、処方する薬を決める精神科医も、ベンゾ系薬剤の副作用について説明せず、「ずっと飲み続けても大丈夫」などと説明するケースが多々見られたという。

なぜ医師はそのような漫然処方をしてきたのか。兵庫県の長尾クリニック院長で、多剤投与の問題を扱った著書もある長尾和宏氏は、その背景を次のように説明する。

「ベンゾ系の薬剤はやはり即効性が高いため、時間をかけて患者と向き合わずとも『睡眠』というご利益を手早く与えられる。そのため実力のない医師ほど、患者を喜ばせるためにその場のぎで使っている印象です」（長尾氏）

そして一番の問題は、「そうした薬にもっとも慎重であるべき精神科の専門医が、安易にベンゾ系を処方していること」だという。

「ベンゾ系薬剤を3種類以上処方することは内科では禁じられていますが、精神科では5剤ほどを処方するケースがよくある。また本来は1錠出すところを2錠、3錠と出しているケースも散見されます。精神科病院の入院患者のレセプトを見ると、ひどい薬漬けの人もいますから。そしてそのレセプトの審査は精神科医が担当しているの、ベンゾ規制が精神科だけは手つかずの状況なんです」（長尾氏）

そうした実態の背景には、米国のオピオイドの状況と同じく、「患者を依存症にしたほうが製薬会社や病院が儲かる」という事情もあるのだろう。佐藤氏が確認した03年の国立（現在は国立病院機構）の精神科病院の報告書には、「常用量依存を起こすことにより、患者が受診を怠らないようにする」と、ベンゾジアゼピンの医師にとっての有用性、医院経営への影響を指摘する文章があったという。

「そうしたことを医師がどこまで意識していたかは程度の差があると思いますが、患者が依存症に陥っていることを認識しつつ、漫然と投薬を続けた医師は多いと思います。依存の問題を深く考えなければ、致死性が低い点では使い勝手も良かったでしょうし、だからこそ精神医療の内部から『この薬は危険だ』と声を上げるのが憚られた状況もあったと思います」（佐藤氏）

そうやって患者のことを考えない医師によりベンゾ系薬剤を処方され、依存症になってしまった人の中には、「社会生活からドロップアウトしてしまう人も多い」と長尾氏。

「大量の抗うつ剤の服用を続けた人は肥満にもなりやすく、糖尿病や高血圧、内科系疾患などにもなりやすい。私の印象としては、生活保護を受けている方には、ベンゾ系薬剤を飲んでいる方がかなり多いです。ベンゾが生活保護受給者を作っている部分もあるでしょうし、ベンゾによって生活保護から抜け出せなくなっている人もいるでしょう」（長尾氏）

また薬の作用を味わう目的で、漫然処方を行う医師を利用し、意図的にオーバードーズをする人もいます。なお、ベンゾ系薬剤の常用を続けると、認知症のリスクも高まってしまうという。

「ベンゾ系薬剤の多剤投与を続けると、脳の認知機能が低下し、認知症のリスクが増大することも明らかになっています。またベンゾ系薬剤の減薬には非常に長い時間がかかりますし、患者さんの負担も本当に大きい。本来は減薬に取り組むべき精神科が、ベンゾ系薬剤の漫然処方を続け、患者と社会に悪循環を生み出している現状には、私は怒りしか感じません」（長尾氏）

「オピオイドに似た作用を持つベンゾ系薬剤」

8 ドコモ「ahamo」はおトクの限界値？

9 楽天銀、1,000万口座突破で経済圏に敵なし

10 OOPayキャンペーンまとめ2月12日版

PR 下剤などを使わず、体の自然な働きによって便秘を解消/便秘薬に変わる驚

PR 下剤などを使わず、体の自然な働きによって便秘を解消/便秘薬に変わる驚

プレシオスポーツ ミニ

102,528円

ネスカFミニ（フラットスタイル）

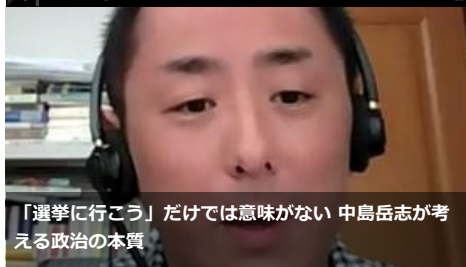
112,279円

ソラリア F型 テラスタイプ 単体

58,291円

CYZOトーク

すべて見る >>



人気連載

すべて見る >>

元木昌彦の『週刊誌スクープ大賞』

「週刊現代」「FRIDAY」の編集長を歴任した“伝説の編集者”元木昌彦による週刊誌レビュー

▶一覧へ

“キング・オブ・アウトロー”瓜田純士、かく語りき

“キング・オブ・アウトロー”瓜田純士の最新情報をお届け！ 嫁・麗子も時々登場。

[トップページへ](#)[注目記事](#)[『俺の家の話』クドカンが描く“育ちの差”…幼少期に形成された金銭感覚は大人になっても変わらない](#)

「ベンゾ系薬剤で人生を壊された人が日本に多いのは確かです。その薬を処方してきた医師の罪は重いといえるでしょう。しかし依存症者本人が立ち直るには、自助グループに参加するなどして、自分が薬に頼った原因を探り、自分の生きづらさに正面から向き合うことが必要な場合もあります。そうしたことを特にせず、人生を壊された恨みつらみを募らせて、『何もかもが医師のせい』と精神科医を過剰に攻撃している人も一定数いるわけです。その点では、真面目に医療に取り組んでいる精神科医は気の毒なわけですが、心ない精神科医の中には『精神医療を攻撃する人たちはみんな頭がおかしい』と乱暴に決めつける人もいます。そうした実情が、この問題の解決を難しくしている部分もあるでしょう」（佐藤氏）

では、この状況を改善するためには、何が必要なのだろうか。常用量依存のリスクや、薬一辺倒の精神医療への警鐘は、各医学会のガイドライン等にも盛り込まれるようになったが、ベンゾ系薬剤の処方は今も続いている。

「即効性に優れたベンゾ系薬剤は、一時的な使用が有効なケースがあるのも確かです。問題は長期処方が漫然と行われていることなので、まずは使用期間について精神科も含めた一律で厳しい制限を設けるべきです。規制の緩さが原因で依存症が蔓延している状況は、米国のオピオイド危機とも非常に似ていますから」（長尾氏）

またアルコールや覚醒剤の依存症者が参加できるような自助グループも必要だ。ベンゾ系薬剤についてもそうした組織は各地で立ち上がっているが、まだ数は多くないのが現状だ。

「そして処方薬依存を専門に扱う病院もほとんどありません。そうした背景には、アルコールや違法ドラッグなどと比較すると、やはりベンゾ系薬剤の問題が社会問題として認識されていないことが大きいと思います。また現在は麻薬、覚醒剤、アルコールなどの依存への国の対策が、縦割りで行われている点も改善が必要です。脳の報酬系の依存症の問題については、貧困問題とも密接に関わっていますし、組織の連携や統一も必要になってくるでしょう」（長尾氏）

なおベンゾ系薬剤の問題については、先述のように国家賠償請求を目指す団体も出てきているが、厚生労働省は目立った実態調査も行わず、具体的な対応策も提示できていないのが現状だ。

「常用量依存まで国の責任とすると、膨大な人数が賠償の対象になるため、『国としてはそこまで責任をとりたくない』という心情もあるのでしょう」（佐藤氏）

このように国の対応が後手後手に回っているのは、やはり米国のオピオイド危機と似た状況だ。

「大手メディアで処方薬の依存症や乱用の問題が報じられている点では、まだ米国のほうが社会として健全ともいえます。なおオピオイドについては、日本では現状は厳しい規制がありますが、米国で起きた社会問題は、20～30年遅れて日本で起こることが通例です。また日本でも米国と同様に、先発のオピオイドは砕いて使用ができないように製剤方法が変更されましたが、後発のジェネリックの薬剤は砕くことも水に溶かすことも可能です。そこが今後は抜け穴になっていく可能性もあるでしょう」（長尾氏）

米国でオピオイドの蔓延が深刻化したのは、大手メディアの報道が遅れたことが原因のひとつだった。オピオイドとベンゾ系薬剤の問題は、今後も継続して注視していく姿勢がメディアにも求められるのだ。

れびの『テレビ日記』

テレビの気になる発言から、世相を斬る！

[▶一覧へ](#)

じゃまおくんのWEB漫クエスト

マンガレビューブログ管理人じゃまおくんが、インターネットに埋もれる一押しマンガを発掘！

[▶一覧へ](#)

腹筋王子カツオ『サイズー筋トレ部』

“腹筋インストラクター”腹筋王子カツオさんが、自宅でも簡単にできるエクササイズを紹介！

[▶一覧へ](#)

クレジットカードのお役立ち情報サイト

Creditcard Journal